自然との和解と共生

ホビノ・サンミゲル
（ドミニコ会士）

『創世記』によれば、最初の人間が初めて自然と出会った時、それはまさに「楽園」だと感じたことでしょう。人間はその自然の秩序と美しさを眺めて、神の偉大さをたたえ、神からいただいた恵みを万物と一緒に享受しました。神は人間にその自然の支配権を与えました。人間は、神に代わって自然を守り、自然の中に自分の幸せを見出していました。しかし、人間は罪を犯し、自然との関係を破壊し、自然との調和を失いました。

現在、私たちの眺めている自然は、もはや「楽園」ではありません。人間は自分だけの利益を考え、自然に対して奴隷のような扱いをしてきました。科学技術は自然を破壊することによって、生活の豊かさや快適な暮らしを求め、神が創られた本来の秩序を変えようとしています。その結果、今度は自然が人間の生命を奪うような事態が起こりつつあります。核兵器、二酸化炭素や排気ガスなどによる大気汚染と地球温暖化、遺伝子操作などは、生態系と人間の生命を危険にさらしています。

確かに、科学技術は人間の平和と進歩に役立つものです。しかし、神は人間に自然の支配権を無条件に譲ってはいないはずです。自然は私たちのパートナーです。それゆえに、人間は科学技術を、自然に対する一方的な支配力として用いるのではなく、環境に共存している被造物との調和を考えて用いなければならないのです。

自然との関係の見直しは、二十一世紀の人類の大きな課題です。きれいな空気の中で、健康的なものを食べ、美しい環境のなかで、幸せな生活を送るためには、自然との和解が必要です。もし、私たちが自然を救わなければ、自然も私たちを助けてくれないでしょう。

声 十月号

巻頭言　**自然との和解と共生**　ホビノ・サンミゲル

特集　**神の場としての地球環境を考える**

自然との和解と共生　岡田 武夫……4

地球は神の家、私たちの家 ―聖書から想う―　木鎌 安雄……10

自然との共生と人間社会の維持・発展　碇山 洋……16

試される人間 ―神の場における環境問題―　山崎 幸子……22

聖書の世界 130

アウシュヴィッツ　人種と差別 (55)　小平 卓保……28

キリストがわたしの内に生きておられる ―ガラテヤ書を黙想する― ⑩　石川 康輔……34

ひびき パートⅡ ⑩

こおろぎの祈り　グリーリ栄子……40

福音宣教

十九世紀後半『奄美大島における宣教』 ―パリ外国宣教会の布教状況―　廣瀬 敦子……44

時評

宗教　諸宗教との対話を求めて ⑩ 聖地と巡礼と聖人崇拝　岸 英司……50

社会　20世紀から21世紀へのメッセージ　森 茂也……54

生活　テレビの声が、「神」の声　川端 強……58

声川柳　橘高薫風選……61

声俳壇　稲畑汀子選……62

新刊紹介　西山俊彦『カトリック教会の戦争責任』　編集部……64

編集後記（傘木）

表紙　ジオットのモザイク画「小舟」（協力・和田幹男師）
巻頭言・目次カット　白木久子　さし絵　和田美鈴

自然との和解と共生

岡田（おかだ） 武夫（たけお）
（カトリック東京教区大司教）

《四つの和解》

浦和教区では毎年クリスマスに、司教のメッセージを発表し、向こう一年間の宣教司牧の方針をお伝えしています。二〇〇〇年を迎えるに際しては、大聖年メッセージ『ヨベルの年……和解、そして、いやしと安息と希望の年』を教区のすべての皆さんに送りました。

そのなかでわたくしは「四つの和解」ということを述べています。すなわち、「神との和解」「隣人との和解」「自分との和解」そして「自然との和解」です。

実はこれは台湾のカトリック教会から学んだことです。昨年八月、香港でアジア司教協議会連盟（FABC）信徒局主催の研修会があり、日本のカトリック教会を代表して浦和教区・宣教司牧評議会からわたしを含む数名が出席しました。この研修会で、台湾から出席した信徒がこの「四つの和解」ということをいわれたのです。

《自然との和解》

このなかでとくに「自然との和解」という言葉に惹かれました。こちらがどれだけ台湾の教会の意図を理解したかは怪しいものですが、この提言はわたくしの心に深く印象づけられたので、浦和教区司教の大聖年メッセージの中にとり入れさせていただいた次第です。

今日では、「自然との和解」といえばまず「環境破壊」の問題が想起されます。世界中で開発の名を借りて環境破壊がまかり通り、地域住民の生活・文化の権利の侵害が横行しています。

もう三年前のことになりますが、フィリピンの地元住民の要請にこたえて、フィリピン・パンパンガデルタ開発計画の実情を学ぶ現地学習会に参加したことがあります。そのとき、開発・支援を謳いながら、いかに地域住民の声を無視した一方的な搾取・侵害が行われているのか、ということを痛感しました。地域開発の名において新たな経済侵略が進行しています。この開発・支援に携わっている日本企業がどのくらいこのことを自覚しているでしょうか。どのくらい地域住民の苦痛と悲嘆を理解しているでしょうか。大きな疑問です。

《環境破壊と海外支援》

日本の司教協議会はこのような現状を踏まえて、海外支援に関する根本理念を明確にするため、一九九九年六月十六日、『海外支援と基本理念』という声明を発表しています。そこで述べられていることは自然との和解と共生のために是非とも基本とすべき方針・態度です。

以下にその中心となる部分を引用します。

「発展あるいは開発とは、平和の新しい呼び名と言えます。真の開発とは、所有や支配や利用を、神の似姿である人間とその使命に従わせることです。この開発は自立、連帯、情報公開などの原則に立ち、人間の尊厳を基本において行われなければなりません。真の開発を妨げているのは社会悪です。教会はこの社会悪の根元に、人間の罪をみています。これは、キリストを十字架に追いやった人間の根元的な罪です。人間は、他の人を踏みにじり、自分の欲望を満たす行為によって、社会悪を増大させています。戦争、宗教間の対立、民族同士の争いなど、すべて人間の罪のなせる業なのです。戦争と軍備は人々の真の開発に際し、最大の敵となります。また、少数の人の所有が多数の人の存在を犠牲にしてなりたっているような状況がありますが、犠牲となっている人々の存在を守るような開発を進めなければなりません。（中略）教会は、人間尊重の立場から総合的な開発を目標にした発展、すなわち経済的価値だけではなく、社会的、文化的、精神的な価値を含めた発展を願っています。」

是非とも多くの人がこの声明を読み、このことを考えてみていただきたいとお願いします。

《人間と自然》

それはさておき、今回、「自然との和解」という観点から、この問題を根源から考えてみたいと思います。

いったいこの問題の根源はどこにあるのでしょうか。

自然は人間存在の基本的な条件となっています。自然との関係でいえば、人間はいわば「自然内存在」である、といえましょう。

人間は自然のおかげで生存できる生き物です。空気、食物、住居など生存に必須のものはすべて自然そのものあるいはそのたまものです。

人は人なしには人となれないし生きていけないとすれば、なおさら、人は自然の恵みなしに一刻も生存することがおぼつかないといえます。実にわたしたち人間は自然を離れて生存できない存在なのです。

ところでわたしたちは「自然」という言葉を自明のように用いていますが、「自然」をどのように理解したらよいのでしょうか。

難しい議論は横に置き、ともかく、まず、自然とは人為的なものではない、といいましょう。いわば人間の手の加わっていない部分が自然なのでしょう。しかしそれでは人間と自然との境界はどこにあるのでしょうか。人間は自然の一部ではないのか。それとも自然とはどう違うのか。

この問題を人間と自然との「連続性」と「不連続性」という観点から考えてみたら少しはこの問題の解明に近づけると思います。

《「連続性」と「不連続性」》

人間と自然との間には連続性と不連続性があると思います。創世記は天地万物と人間の創造を語っています。それでは、人間と他の生物との違いは何処にあるでしょうか。

キリスト教の人間観によれば人間には人格（ペルソナ）がある。人間は神の似姿であり、人間は神に似たものとして造られた。そこに人間の尊厳があります。そのようなものとして神は人を造られた。

これがわたしたちの信仰理解です。

しかし他方、同じ創世記は、人間は土から造られたものである、という見方も伝えています。地の塵である存在に神の息が吹き込まれるとそれは生けるもの、人間となります。

人間は地の塵から造られているという人間観は人間を「肉体」とみる人間観につながります。

他方、神の霊が吹き込まれた「生きるもの」であるとみれば、人間は神とのつながりをもった霊的存在である、ということになります。霊魂である人間と考えれば人と自然との間には不連続性があります。塵から造られ塵に戻る肉体である人間に着目すれば、人と自然との間には連続性がある、と言えましょう。

肉体は自然とのつながりがあって肉体として存在しているのであり、つながりがなくなれば存在しなくなります。そのつながりの在り方が肉体の在り方であるのです。

人間は、神の似姿であり復活のキリストの兄弟姉妹です。その人間は、地上においては自分の体においてしか神の栄光をあらわすことができません。肉体は神の霊の神殿であると聖パウロがいいます（1コリント6・19）。神の霊の働きは肉体を通してしかあかしすることができません。

従来、カトリック教会では「不連続性」の方が強調されすぎたように思います。

《神の栄光のあらわれ》

有名なヨハネ福音九章で、なぜ生まれつき目が見えないのか、と問われてイエスはいいます。

「本人が罪を犯したからでも、両親が罪を犯したからでもない。神の業がこの人にあらわれるためである」（ヨハネ9・3）。この「神の業があらわれるため」というイエスの言葉は何をいっているのでしょうか。

思うに、神の栄光は人間の肉体においてあらわれなければならないのです。ところでその肉体は自然との連続性のなかで考えられます。そうだとすれば自然とこの世界も神の栄光のあらわれるべき舞台でなければならない、ということになります。自然と肉体との連続性のなかで考えてみたいのです。

さて、人間が自然に働きかけて形成したものが「文化」CULTUS とよばれます。CULTUS は元来「農耕」という意味でした。ここから「礼拝」などの意味が派生してきたといわれます。

文化は民族の存在証明のようなものです。文化はそれぞれの民族や特定の人類の集団に固有のものです。その集団の特徴と美しさのあかしとなるべきものの総体といってもよいでしょう。

文化は人間が自然とどのように共生しているのかをあらわす指標のようなものです。自然の状況が違えばそこで生きる人々の生活も多様となります。その多様さのなかに神の業があらわれ、神の栄光が輝き出る、といえましょう。「文化の福音化」を説いたのはパウロ六世の使徒的勧告『エヴァンジェリイイ・ヌンチアンディ』です。

「文化」に対して「文明」があります。こちらは「都市」CIVITAS から起こりました。聖書ではよい意味を持っていないようです。都市の建設からバベルの塔が出てきます。バベルの塔は、神に逆らい神から離れようとする人間の生き方の象徴となっています。文化は多様ですが文明は一様です。それは世界中の都市が基本的にその形態において一様であるのに対応しています。注①

《自然における神の存在の働きと美しさ》

わたしたちはお寺や神社の境内にいると、ほっとしたり、そこはかとないやすらぎを覚えるのです。母なる大地に包まれるような安心を覚えます。神社やお寺の境内はよく手入れ

されていて、四季の花々や紅葉がなどが人々を楽しませ和ませてくれます。実によく自然と融合しているのです。

ところが教会建築のほうはむしろ自然との対決をあらわしています。西欧では、厳しい自然を克服するものとして教会建築が存在しているかのようです。

教会も、自然との調和と融合のなかで神の美しさをあらわすように建築することはできないのでしょうか。これと関連して、日本の汎神論的な風土のことも考えてみたいと思います。これは、たとえば、大きな木に注連縄を張る、というような習慣のことなどを指しています。この場合、何もこの木を、唯一の神として礼拝するということではありません。巨木の存在に何か神秘的な偉大な力を感じていることをそのように表現しているのです。そもそも「神」という言葉は霊的な力を指し、キリスト教の神とはまったく無縁なのです。それなのにキリスト教の神を「神」と訳したために混乱と誤解が生じたのかもしれません。「神」とは中国語でも「霊」という意味であり、神父とは霊父のことだといいます。

日本では偉大な業績を残してなくなった人が「神」に祭られたりします。また、まだ生きている人でも「神」になることもあります。とくに何かに秀でた人を「神」と呼ぶことがあるのです。この場合は賛嘆と揶揄の入り混じったニュアンスで使っているので、単に「名人」という位の意味なのです。

かつて多くの民族は自然のなかに超越的存在とその働きを感じ取るという鋭敏な感受性をもっていました。現在の都市化の時代、この感覚を取り戻すことは重要な課題ではないでしょうか。わたしたちはそれをとくにアイヌの人々やアメリカ・インディアンの伝統・文化から学ぶことができると思います。

詩編は自然の動きを通して、神を賛美する祈りの模範を提供しています。注②

《修道生活と自然》

カトリック教会の歴史のなかでも、自然との和解と共生を見事に実現させた例がみられます。それは、修道生活です。

まず聖ベネディクトとその弟子たちの例です。

ヨーロッパの原野のなかで祈り働くという生活はまさに肉体と自然の連続性のなかで日々の生活と労働を神の栄光とするものでありました。しかし、ベネディクトの弟子たちの開拓した土地が次第に都市化する過程で修道生活の清新さにかげりが生じ、その結果、自然との関係に乖離が生じたのではなかったでしょうか。

それから聖フランシスコとその弟子たちの修道生活があります。彼らの掲げた「清貧」の理想は人と被造物とのあるべき関係の追及であったと思うのです。フランシスコにとって

自然も動物も神の創造のみ業であり、神の栄光の現れでありました。しかし、修道生活の清貧の理想に問題が生じ始めたとき、フランシスコの示した、人と被造物とのあるべき関係の追及も困難になってきたのではないか、と思います。

《被造物と人間》

人は被造物に支配されてはなりません。しかし同時に、人は被造物を勝手に支配してもならない、とも言えます。人は神の計画に従い、自然とともに歩むことによってこそ神の栄光をあらわすことができるのです。そうしてこそ、被造物を通して、被造物との融合と連帯のうちに、神の栄光と美しさをあらわすことができると信じます。聖書には、被造物もキリストによるあがないにあずかるのである、という考えが明確に示されています。

「被造物は、神の子たちの現れるのを切に待ち望んでいます。被造物は虚無に服していますが、それは、自分の意志によるのではなく、服従させたかたの意志によるものであり、同時に希望を持っています。つまり、被造物も、いつか滅びへの隷属から解放されて、神の子供たちの栄光に輝く自由にあずかれるからです。」（ロマ8・19－21）。

被造物のあがないが完成するとき、それは新しい天と地の現出する終末です。

「わたしはまた、新しい天と新しい地を見た。最初の天と最初の地は去って行き、もはや海もなくなった。更にわたしは、聖なる都、新しいエルサレムが、夫のために着飾った花嫁のように用意を整えて、神のもとを離れ、天から下ってくるのを見た。そのとき、わたしは玉座から語りかける大きな声を聞いた。『見よ、神の幕屋が人の間にあって、神が人と共に住み、人は神の民となる。神は自ら人と共にいて、その神となり、彼らの目の涙をことごとくぬぐい取ってくださる。もはや死はなく、もはや悲しみも嘆きも労苦もない。最初のものは過ぎ去ったからである。』

すると玉座に座っておられる方が、『見よ、わたしは万物を新しくする』と言い、また、『書き記せ。これらの言葉は信頼でき、また真実である』と言われた。」（黙示録21・1－5）

注① 「文化と文明」「文化の福音化」については拙著『宴への招き』（あかし書房）を参照していただきたい。

注② 天は神の栄光を物語り
大空は御手での業を示す。
昼は昼に語り伝え
夜は夜に知識を送る。
話すことも、語ることもなく
声は聞こえなくても
その響きは全世界に
その言葉は世界の果てに向かう。（詩編19・2－5）

地球は神の家、私たちの家

―聖書から想う―

木鎌（きかま） 安雄（やすお）
（大阪教区信徒）

地球を家として考えると、聖書のテーマをいくつも思い出す。聖書は地球について多くのことを言っている。それを一つの言葉に要約すると「家」である。かつては「この世は自分の家ではない。単に過ぎ去るものだ」という聖書の見方があった。この姿勢には、肉体の放棄や肉体への恐怖、政治経済の回避があり、個人的な信心の強調があった。これに反して、地球が家であるというとき、地域的にまとまった信仰生活、政治経済への期待や解釈、人間関係が強調されてくる。

一．神の家

地球が神の家であるということは「救い」と「創造」という二つの主要な聖書的テーマと関係している。

「救い」について考えてみよう。ヨハネは「神はその独り子をお与えになったほどに世を愛された」（三・一六）と言っている。この言葉を聞くと、神が愛し救うのはこの世の人間だけと思ってしまう。キリストの救いは人間だけに及ぼされると考えてしまう。

しかし新約と同じように旧約でも、神は造られた全被造物を刷新すると言っている。エレミヤは地球に関して「いつまでこの地は乾き、野の青草もすべて枯れたままなのか」（一二・四）と尋ねている。これに対して神は、衰退した地球へのあわれみと人間の再生と答え、神が地球をよみがえらせるという約束になっている（詩編一〇四・三〇）。人間に与えた契約によって、神は宇宙を救う気持ちを示している。ノアとすべての生き物との契約はそれをよく表している（創世記九・一〇）。地球とのこの契約（創世記九・一三）は神の家への愛と思いやりが現れている。

神のこうした愛と思いやりを示している契約の上に、新約聖書は、イエス・キリストが和解するお方として描かれている。イエスが成就した和解は全被造物に及んでいる（コロサイ一・一九―二〇）。パウロが言っているように、全被造物は神の子たちの現れるのを待っている（ロマ八・一九―二二）。私たちと地球はイエス・キリストによって刷新されたのである。地球そのものは、人間と同じように神の救いの対象となっている。

「創造」について考えてみよう。創造は和解と関係している。それはパウロの言葉にはっきりと出ている（コロサイ一・一五―二二）。イエスが見えない神の姿であるということは、キリストが創造者である神と創造のときに一つであったということを教えている。

今日、神の絶えざる創造が強調されている。このことは神の概念をダイナミックなものにしている。また私たちも絶えざる創造に参加していることを示している。ヨブ記三八章と三九章が示しているように、それは創造を神が絶えず喜んでいることである。「神はお造りになったすべてのものをご覧になった。見よ。それは極めて良かった」（創世記一・三一）という言葉から創造が善であると私たちは見ている。

イエスはこの地球上の家にいた。イエスの存在が家に在るということは、つまり完全なる人間であるということは神の啓示である。したがって受肉の愛を地球から排除することはできない。キリスト者は創造を神から生じたと見ているから、地球を信仰から解釈するとき、地球は神の力と現存のしるしであると考える。キリスト者は、科学を神が地球を秩序づけていることを解釈するための神学的規範の一つとして見ている。神の法には道徳的なものと自然的なものが含まれている。したがってエコロジー的破壊のいろいろな実例は神と科学の法を破ること

と見ることができる。

二、人間の家

家は「分かち合う」ところである。神が地球を私たちの場として計画されたとき、家は分かち合うものになった。ときどき家庭を持ったと言う言葉を耳にするが、その家庭は現在住んでいるところの意味もあるしそうでないときもある。家庭という言葉が言外に意味しているものは、私たちのアイデンティティをもっともわかりやすい形で表している場所である。したがって家には人がいないことがある。

家は分かち合うものである。ふつう家は、その家で起こる関係のために、そこに住む人びとと感情的に関わる住みかと見ることができる。つまりよい時間を過ごすところ、意味ある他者と出会うところ、他者とともに出来事を体験するところである。ここには主として人びとの分かち合いがある。ときにはペットや花や庭との分かち合いもある。分かち合いの関係は、その場所に一つのはっきりとした環境を与える。環境はその環境自体をそれぞれの方法で整える。その環境つまりその家で他者と一緒に体験する出来事のためにその場所を尊重する。あ

る意味で場所と関係は生まれるものである。つまり誰かのことを考えると別の人のことも想起されるのである。

キリスト教伝統は、分かち合いされた家（家庭）の姿を提示している。イエスは金持ちの青年に掟を示している。隣人を自分と同じように取り扱うように要求している（マタイ一九・一九、二二・三九、レビ一九・一八）。聖書によれば私たちは独りで生きるように造られなかった。他者と地球を分かち合うということは、聖書の金言と言ってもよいだろう。

同じように中心的なものであるがあまり認められていないことは、地球と人間以外の被造物との分かち合いである。（創世記一・二八、二・一五）。つまり家畜の取り扱いに関してである。（申命記二五・四、マタイ一二・一一、ルカ一四・五、一コリント九・九―一〇）。同じように土地も分かち合うものとなっている。土地には尊敬を払わなければならない独立した価値がある（レビ二五・一―七）。

家は「思いやり」の場でもある。家が分かち合いの場であることは、家が思いやりの場であるという理想と密接に関連している。つまり家は他者のための思いやりの場であり、かつ他者が私たちを思いやる場でもある。これをよく示している一つのことは、家が政治・経済・宗教や性差からくる抑圧や弾圧からの避難所であることで

ある。このことは、家が体と魂と霊の燃料補給所、つまり力と刷新を見いだす場であることを示している。人間は他者の思いやりがなければ生きていけない。このことには神学的な意味も含まれている。つまり家は、創造、再創造、癒しがある場である。

この意味が単に冷たい法律主義的共存であれば、地球を分かち合うことはできないと聖書は主張している。しかし、いまや分かち合うことは思いやりの形を取らなければならなくなっている。この思いやりは、人間や動物、生きているものすべてに及んでいる。申命記（一九・一四）、箴言（二三・一〇―一一）、ミカ書（二・二―五）は、土地と人間との思いやりを示している。同じように安息日も奴隷や家族の者だけではなく家畜や寄留する人びとにまで広げられる（出エジプト二〇・八―一一）。

これまで見てきたように動物への思いやりはこのことをよく示している。（出エジプト二三・四―五、レビ一九・一九、申命記五・一四、二二・一―四、二二・一〇、二五・四）。動物が人間に使われるとき、その動物を思いやりをもって使わなければならない。動物を殺すときも、聖なる、畏敬の念をもって行わなければならない（申命記一二・一五、二一、使徒言行録一〇・一三、一一・七）。創世記から見ると、神は、初めは人間に野菜を食べるように求めていたのではないだろうか。なぜなら楽園追放後、人間は動物を食べることを認められたからである（創世記九・二―三）。このような動物への思いやりは、平和の国のイメージである家を通して伝えられている。狼と子羊、豹と子山羊、子牛と若獅子は共に育っているからである（イザヤ一一・六―九、六五・二五）。

家はまた「対立の場」でもある。しばしば対立は破壊の道に至る。対立をうまく処理しないと、家は破壊される。それは新聞やテレビで報道されているように、たとえばこの対立は離婚や暴力などさまざまな結果から生じる。確かに罪の根源が地球に根ざしていると言えるであろう。しかし同時に思いやりの構造があれば、家の退廃を救うことができる。

聖書は、人間の行動の中に罪が現存することについてよく見ている。歴代誌下は「罪を犯さない者は一人もいません」（六・三六）と言っている。聖パウロは「人は皆、罪を犯して神の栄光を受けられなくなっている」（ロマ三・一三）と言っている。人間の願望と神の願望との間には本性的と言ってもいいほどの対立がある（ヤコブ四・四）。荒れ野でのイエスの誘惑（マタイ四・一―一一）はこの対立を生き生きと描いている。悪魔についてふれているところは、ほとんどいつもこの対立になっている（ヨハネ六・

七〇、エフェソ四・二七、ヘブライ二・四、一ペトロ五・八、黙示録一二・九）。

悪と罪に抵抗するとき私たちを助けるために、神は、正義の道へ導く規定を与えている。身体の傷害の償いを規定している（出エジプト二一・二八、二二・一五）。畑や人道上の規定もある（申命記二三・二五、二四・二一―二二）。敵対する者との関わりを規定したものもある（出エジプト二三・四―五、レビ一九、申命記二〇・一九―二〇、二二・六―七）。これらはすべて正義の道を指し示している。旧約聖書にはこのように私たちの家である地球に対する人間の在り方を提示している。地球や家は人間の罪深さや不正を示している。しかし同時に正義の可能性も示している。人間は家を個人的な利益のために誤用し、虐待することもあるが、神の考えを生きる場にすることもできる。

家には「恩恵」がある。神の恩恵が実在することは言うまでもない。人間にはこの恩恵に頼り恩恵を生き抜く機会がある。しかし罪と誤用・虐待の可能性もある。恩恵をいただいても正反対に受け取ってしまうことがある。しかし「新しい天と新しい地」（黙示録二一・一）があることがわかっている。神が再創造するので、神の平和と言われる宇宙的一致があることがわかっている。

これまで、キリスト教の伝統によれば、地球は人間の家でありまた同時に神の家でもあると見てきた。決してホテルではない。動物や植物や川や土地も家である。一言で言うとすべての被造物は家である。換言すれば宇宙はすべての被造物のための家である。再び言うが、ホテルではない。植物のための家であり、岩石のための家であり、水のための家であり、命に満ちた土地のための家である。地球は、存在するすべてのものの必要性と喜びを満足させるためにある。人間は、昔から、神が被造物とつくってきた関係を、つまり動物と植物との関係、土地と人間との関係、水と命との関係、人間同士の関係を大切にしてきた。

人間は関係によって存在するという意味で、存在するすべてのものは家にいるのである。地球は外面的な家ではなく、人間が家の一部なのである。地球の一部なのである。地球という命の織物である被造物は、神の家の一部である。その被造物が地球を構成しているのである。私たちは家にいるのではなく、私達が家なのである。

三、おわりに

圧倒されそうな環境問題に直面するとき、その大きさのために負けそうになる。私たちの家である地球を救うために、個人で何ができるのだろうかと不安になる。しかし、個人の力は小さいが、いくつもの小さい力が一つにまとまれば、それは結果として現れる。一人の人がマイカーに乗ることを止め、他の人のマイカーに相乗りしたり、公共交通機関を利用してもたいしたことはないが、数千の人が同じような努力をすれば、その違いが明らかであろう。

聖書はそれを教えている。「キリストと結ばれる人はだれでも、新しく創造された者なのです。古い者は過ぎ去り、新しいものが生じた」（二コリント五・一七）。個人の回心は、同じ家に住む人、家族に影響を与える。その家族は隣人に影響を与える。これをエコロジー的生き方、共生の生き方と言うなら、まず個人がこの生き方をしていけば、だんだん地球的次元、地球という家にまで広がっていくであろう。なぜなら、個人は、地球という家に住んでいる家族の一員であるからである。

この和解した地球という家族は、その家族の者だけではなく、その家族と共に住むすべての被造物と相互依存していることに気がつくであろう。そうすれば、すべての被造物に畏敬の念をもって接することができるであろう。なぜなら被造物はすべて神が造られ、よしとされたものだからである。

このエコロジー的生き方は、聖人の生涯が例証している。聖ベネディクト、クレルボーの聖ベルナルド、聖フランシスコ、リジューの聖テレーズ、トラピスティヌのマザー・ベルクマンス、マザー・テレサなど列挙にいとまがない。こうした聖人たちの生活の中心には祈りと労働と読書があった。エコロジー的生き方には、祈りと労働と読書が必要なのである。年齢によって、または心身の状態によって労働ができなくなった人びとにとっての労働は、ただ生き続けることである。身体的に生き続けることだけで十分な労働である。目が見えなくなった人にとっての読書は、人の話やテープやCDを聴くことによって可能になる。つまり祈りと労働と読書は、すべての人間の生活の在り方である。つまり祈りと労働と読書の生活は、観想修道会の生活であると同時に、私たち人間一般の生活でもある。ここにこそエコロジー的生活の元がある。

このエコロジー的生き方から、中世の神秘家たちが発見したように、浄めの道、照らしの道、一致の道を私たちも見つけその道を歩んで行くことができるであろう。

自然との共生と人間社会の維持・発展

碇山（いかりやま） 洋（ひろし）
（金沢大学経済学部助教授）

霊長類に属するヒト科ヒトという生物が自然の一部であり、自然の中で、自然の法則に従ってしか生きていけない存在であることは、だれでも理解できることである。どれほど科学技術が発達しても、それは自然界の法則からはなれた魔法の杖ではなく、自然の法則に従うことによって自然の法則を利用しているにすぎない。また、人類にとって地球と同等かそれ以上に条件のよい他の天体に移住することがいまのところ夢物語である以上、「宇宙船地球号」に用意された資源を使い果たしたり、船内の環境を極度に悪化させることが深刻な結果につながることも、さほどの専門知識がなくても理解できることだ。

宇宙船の中の宴

宇宙船地球号の資源と環境が有限であることは明らかだが、有限であるにしてもやはり膨大なものであって、人類はその有限性をさほど意識せずに、かなり勝手気ままにふるまってくることができた。人間の過ちも、自然の度量の大きさに許されてきたのだった。

しかし、最近数十年の間に、事情は大きく変わってきた。産業革命以来すこしずつ加速しながら進行してきた過程が、第二次世界大戦後の先進資本主義諸国の経済成長によって、それまでと比較にならない規模と速さで進むようになったのだ。

平均気温が目に見えて上がり、「異常気象」が頻繁に報告されて常態化しつつあるが、その原因のかなりの部分は、人間活動によって排出される温室効果ガス、なかでも石油などの燃焼から発生する二酸化炭素だと考えられている。開発行為は熱帯雨林をはじめ森林を猛烈な勢いで消失させ、二酸化炭素をさらに増やして温暖化に拍車をかけている。気温や降雨のパターンの急激な変化は、長い年月をかけてそれぞれの土地に定着してきた農業に打撃を与え、人口爆発にともなう食料危機をより深刻化させるだろう。

オゾン・ホールや酸性雨の問題でも、状況は悪くなるばかりだ。

事態は抜き差しならないところまで来ている。有限な宇宙船地球号のなかでの節度をわきまえない行動がどのような結果につながるかは、冷静に思考力を働かせれば理解できるはずだ。しかし私たち人間は、少し考えれば分かりそうなことに、やってみてたいへんなことになるまでなかなか気づかないもののようだ。

いまここで起こっている地球環境問題

地球温暖化のもたらすものは非常に深刻なのだが、極地の氷が溶けて自分の国が海に沈むといった危機にでも直面しなければ、数十年のうちに気温が二、三度上がるといっても、それがどういう問題かピンとこないのも無理からぬことだ。同じ地球上ではあるが、どこか自分の知らない遠い場所で進む熱帯雨林の消失も、なかなか実感をもって考慮しにくいかもしれない。

ダイオキシンの問題は、ひとつの大きな警鐘となった。自分の住む町のゴミ焼却施設から出る物質が、自分や子どもたちに恐るべき害悪をもたらす。しかも、そこで燃やされているのは、毎日の自分たちの生活から生まれたゴミなのだ。

空気中のダイオキシンは目には見えない。測定される濃度も、何兆分の一といった桁だ。その害も、きょう明日に出てくるというものではない。つまり、ダイオキシンの有害性は、直感だけではつかむことができない。しかし、「あの工場」で燃やされる「このゴミ」が「この私」に害を与えることは明らかだ。

直接には見えないものをこうしてつなげて考えることは非常に重要だ。ここには大きな飛躍がある。見えないものをつなぐことができるようになれば、自分の運転するクルマが出す二酸化炭素が気候変動につながり、大雨による災害を引き起こしたり、干ばつを起こして飢餓の原因にさえなることを意識できるようになる。環境問題

はどこか知らない遠いところで起こる問題ではなく、ここで起こっているのだ。

このことは、空間的にだけでなく、時間的にも同様だ。原子力発電によって生じる放射性廃棄物のなかには数万年ものあいだ放射能を持ち続けるものがある。危険きわまりない放射性廃棄物を何万年も安全に管理できると考えるのは能天気にすぎる。かなり高い確率で起こるであろう放射能もれ事故は、いつか知らない遠い未来の問題なのではなく、いま始まっているのだ。

一部のひとがもう手遅れだというほど、環境破壊は進んでいる。手遅れなのか、まだ間に合うのか、それはことを手遅れにさせないための努力をつくしたあとに分かることだが、まだまだ大丈夫とのんきにかまえていられないところに来ていることはたしかだ。他の生物たちの犠牲に目をつぶれば、自然は人類の行う環境破壊をかなり寛大に見逃してくれていたのだが、もう限界を超えつつある。人類の生存条件そのものを、他でもない人類の行為が掘り崩しつつあるのだ。

必要な社会システムの改革

環境問題は、いつか分からない遠い未来に、どこか知らない遠いところで起こるのではなく、いまここで起こりつつある。この足もとの環境問題を解決しなければ、私たち人類に未来はない。

まず、それぞれの生活を見直すことが大切だ。無駄に電気を使っていないか、クルマに乗らずに電車やバスですますことはできないか、缶や瓶はリサイクルにまわしているか、有害物質をふくむ商品を避けているか、……やるべきこと、できることはたくさんある。しかし、それで地球環境を守れるかといえば、残念ながら答えはノーだ。

省エネや風力発電などの技術開発を軽視し、原子力発電所の増設一本槍の電力政策。収益性が悪いからと公共交通のサービス低下や廃止が進めば、クルマをつかわない生活は難しい。再利用しようにもあまりにバラバラの色と形の瓶類。高度化し複雑化した商品にどんな有害物質が含まれているかは、一般の消費者にはなかなか分からない。生活者には時間と、経済力と、そして何よりも情報が、決定的に不足している。まして、ダム建設や干拓、埋立といった環境破壊は、生活態度を改めることだけではくい止めることはできない。

社会のシステムそのものの改革が、どうしても必要だ。そのためには、国や地方自治体など、公共部門の政策、役割が重要だ。

北欧を先頭に、ドイツ、オランダなどヨーロッパ諸国では、環境問題への対応が進んでいる。市民の意識が高いことも確かだが、市民の意識に応えそれを活かす政策、市民の意識を高めるのに役立つ政策がとられていることがより重要だ。

ドイツは、期限を切って二十一世紀はじめには原子力発電所をすべて廃止することを決定した。電力会社ははじめつよく反対したが、世論に押され、政府と電力会社の間で合意が成立した。

北欧からはじまった環境税は、ヨーロッパ全体にひろがりつつある。

オランダでは干拓地を湿地にもどす計画が進められている。せっかく多くの費用をかけて干拓した土地を湿地にもどしているのだが、政府の担当者は、「われわれは少し干拓をやりすぎた。その分を元にもどしているだけです」と事もなげだ。

市民主体の社会的規制

先進諸国では、経済的な負担をともなっても環境を保全しようという政策が、さまざまな抵抗をのりこえて実現しつつある。経済活動を行うためにはその前提として人間社会が維持されなければならず、人間社会を維持するためにはその前提として自然環境が維持されなければならない。したがって、環境保全のための経済的負担は、経済活動で利益をあげる立場にとって、より長期的・安定的に利益をあげるための必要経費なのだ。資本主義的な利潤追求は環境破壊を顧慮しないものだというけれども、長期的に利潤をあげようとすれば、この必要経費を削除するわけにはいかない。

環境保全のための経済負担が社会全体としては一種の必要経費であることは、冷静に考えれば理解できる。しかし、個々の企業にとっての問題は、負担した費用に見合った利益が自分のところにもどってくるかどうかということであり、直面している熾烈な競争で生き残ることが目前の死活的な課題であるときに、長期的な観点で必要経費を考慮するゆとりはないということである。

だから、環境問題の解決には、何らかの形での社会的な規制が必要なのだ。

社会的な規制の主体は、さしあたり、国や自治体ということになる。規制といっても、必ずしもいわゆる権力的手段の形をとる必要はない。さまざまな直接規制をはじめ、誘導、助成、指導などを通じて、個々の企業や個人の自由な判断にまかせておいたのではうまくいかない課題を、多少なりともその意志に反してでも、実現させ

るのである。

もうひとつのより重要な規制の主体は、市民運動、市民団体である。環境に有害な商品を拒否する。環境破壊型開発に反対する。商品やサービス、事業にたいして環境保全型の代替案を提案していく。また、国や自治体に必要な規制を求めていく。全体として、世論と運動の力で、社会的な規制をかけていくのである。日本のように国や自治体による規制が弱いところでは、市民主体の規制がとりわけ重い意味をもつ。

環境保護は経済社会を発展させる

ヨーロッパ諸国では、国や自治体による規制がかなり進んでいるが、日本ではこれがきわめて弱い。他の先進諸国とくらべると、環境破壊が野放しにされているといっても決して言いすぎではない。深刻なのは、国民の負託にこたえて環境破壊型の活動を規制し、環境を保全するべき位置にある国や自治体が、大規模公共事業などによって環境破壊のチャンピオンとでもいうべき行動をとっていることだ。諫早湾干拓、川辺川ダム、吉野川可動堰など、ほかに代替案があったり、そもそも役に立たなかったりと、ムダが明らかなのに大きな環境破壊をともないながら強行されつつある事業は、枚挙にいとまがない。なかには、誤った雨量予測を行ったために、市民をかえって危険にさらす辰巳ダムのように、必要がないというだけでなく、事業の「目的」にとっても有害なものさえ少なくない。

地球環境の現状を真剣に考えれば、たとえ必要不可欠な事業であっても、大きな環境破壊は許されない。環境破壊が予測されるときには、費用が余分にかかっても、環境への負荷がより小さい別の方法で事業目的を達成しなければならない。開発の必要性が高く経済力が小さい発展途上国ならともかく、環境保全を優先した代替案の選択が、先進国の責務だ。

環境破壊をともなってでも、開発行為を行えば、何らかの経済的利益が得られるようにみえる。短期的にはそうかもしれないが、環境保全の必要経費を不当に節約すれば、長期的な経済的利益は必ず損なわれる。しかも最近は、短期的利益さえもあがらない事業が多い。

諫早湾干拓事業はその典型だ。この事業でつくりだされる干拓農地は、塩分を多く含む土壌であるうえに排水が困難な劣悪農地で、いまだに営農計画も確定していない。一方で、三〇万人分の下水処理施設に匹敵する自然の水質浄化力をもつ干潟が破壊されたために、潮受け堤防で閉め切られた調整池の水質悪化は深刻だ。この水が

調整池から外の海に排水されるため、有明海では深刻な漁業被害がつづいている。食糧増産の目的を達成できないだけでなく、食料危機の時代を目前に貴重な水産資源を破壊し、漁民の生活に打撃を与えているのである。

ながらくの間、人々は、「経済開発か環境か」という二者択一を迫られてきた。長期的視点に立てばこの設問は明らかに誤りであるし、短期的にもこのような設問が成立する余地は、先進国においては非常にせまくなってきているのだ。

この点で、イタリア北部のポー・デルタ地方で進められている湿地環境再生事業は、環境の保全と再生によって経済を活性化させようとする新たな試みとして、注目されるべきものだ。十五世紀頃から営々と干拓されてきた土地にふたたび水を入れて湿地を再生し、自然公園をつくっているのだ。三万ヘクタールもの干拓地が湿地にもどされ、六万ヘクタールという広大な自然公園が、エコツールズムの一大拠点として成長しつつある。

一九七〇年代まではポー・デルタ地方でも大規模干拓がつぎつぎと行われてきたが、河口域や汽水域の干拓によって、魚やエビ、カニの産卵・保育の場が破壊され、水質も悪化し、アドリア海北部の漁獲量が半減するまでになった。塩分を含む干拓農地での営農も、周辺の農場の六割ほどの収益しかなかった。経済的利益を地域にもたらすはずの干拓事業が、短期的にも成功しなかったのだ。結局、長期的にはもちろん、短期的にみても、湿地という自然環境を湿地の形のまま利用することが、経済的に合理的であることが明らかになり、湿地再生事業が大々的に取り組まれることになったのだ。

自然との共生をもとめることは単なる情緒的な議論ではないし、情緒論で終わらせるわけにはいかない。人間は、芸術や文化、信仰、主義主張の前に、着て、食べて、住まわなければ生きてはいけない。だからこそ、「環境保護（主義）よりもまず経済だ」という主張もそれなりの説得力をもつ。しかし、経済自体が実は自然環境にその基盤をもっており、この基盤からはなれることはできないのだ。環境保全と経済を対立させて考えるべきではないし、実際、両者は対立するものではなく相互依存関係にある。自然から物質やエネルギーを取りだし、人間に役立つように利用し、また自然に返す。環境保全とは、正常な物質循環、エネルギー循環の確立であり、それを実現する社会の確立なのだ。

試される人間
―神の場における環境問題―

山崎（やまさき） 幸子（さちこ）
（『生きろ 諫早湾』出版事務局
日本野鳥の会 長崎県支部）

沈黙の海「諫早湾」
〈撮影・黒崎 晴生氏〉

諫早湾の生物の慟哭の声に憑かれるように、私たちは湾閉め切り以来、干潟再生を願った様々な市民活動に参加しました。この三年、生活が一変した多忙な日々の中で、その思いとは裏腹に、私は遙かに自然とかけ離れた暮らしの中に身を置いてきたように思います。そんな私たち夫婦に、まるで準備していたかのように用意された小さな畑で、春から土と戯れる楽しみと出会いました。自然から奪うばかりの人の姿に疲れ果て、近い将来、朽ちたら土に戻る小さな家を建て、この地で自然エネルギーと大地の恵を糧に暮らせないものかと思っています。

多良山系の丘の上、標高三九〇メートルの場所にある一反ほどの私たちの畑の周りには、春はここかしこに野苺が赤くかわいい実をつけ、枯色の冬を迎える頃にはイヌタデの真っ赤な紅葉が見事です。小鳥の歌の競演に心を遊ばせながら畑を耕していると、たいがいの悩みは忘れてしまいます。初めてこの地を訪れたとき、自然の美しさの中で、天使の声とも思えるイソヒヨドリの歌声に、なぜかとめどなく涙がこぼれ、自然の懐に抱かれて身体が溶けていくような錯覚を覚えました。

自然の移り変わりや装いの色、風や草の香りもなんと完璧な美しさなのでしょう。丘の上に立ってしみじみ周りを眺めると、ひとつひとつが見事に周りと調和し、生かしあって次々と出番を待っています。自然界にあるすべての生命が、寸分の違いもなくその営みを全うするとき、地球という大きな命の集合体が、それぞれの命を繋いで一つの命として機能していることを感じずにはいられません。

豊饒の海「諫早湾」は一九九七年四月十四日、外海との遮断により海の命を絶たれてしまいました。共生を断ち切る二九三枚の鉄板により、膨大な生物の命が、多くの人間を巻き込んで原爆さながらの光景を繰り広げました。

その頃、干潟が地球上でどういう役割を果たしているところなのか、私たちを含めて多くの人は知る機会がありませんでした。その後、いろいろな機会にその効用を知るにつけ、人間の愚かさが原因で、取り返しのつかないことをしてしまったことが悔やまれてなりません。

地球の表面の七割が海で覆われている中で、干潟を含む河口浅海域は海全体の一パーセント以下しかありません。そのわずかな場所で多くの魚たちが卵を産み、稚魚を育て私たちの食生活を支えてくれています。またそこに住む小さな生き物たちの日々の営みは、陸から川を通って流れてくる家庭排水などの汚れを浄化してくれてもいます。陸から流されてくる豊富な栄養で増えた干潟の生き物たちを人間や渡り鳥が食べ、食物連鎖によって干潟のみならず地球上の生態系の微妙なバランスを保っていたのです。

諫早湾では、自然の浄化槽と食糧生産基地を一度に無くしてしまった上、汚れた水は湾外に直接流され、漁民の方たちは漁場汚染に生活を脅かされています。

有明海の中にあって、諫早湾はその子宮とも呼ばれていたところでした。私たちは閉め切られてはじめて見る干上がった海底に絶句しました。見渡す限りのハイガイ（ここで絶滅したと言われている）、林立するカキの林、天を仰いだまま屍をさらしている小さなカニたち。渇土の中ではゴカイやバクテリアに至るまで膨大な数の生き物たちが屍をさらすことなく死んでいきました。干潟の生産性や生物の多様性は熱帯雨林やさんご礁とも匹敵するそうです。目の前にさらけ出された光景は、物言わずしてそのことを物語っていました。も

ちろん日本一の渡り鳥の中継地点でもあった場所を失い、餌不足から渡り鳥の飛来数も激減しました。充分な餌もなく、渡りの途中で力尽きる鳥たちは、相当な数に及ぶものと思われます。

自然は人間が手をつけなければ、地球という一つの命を守るため微妙な調整作用を働かせているのです。地球の誕生から約一三〇億年、生命の誕生は約三五億年前と言われています。脈々と継承された命の存在が現代ほど軽く扱われている時代はありません。科学技術の進歩にどんなに胸を張っても、地球という生命体の中のたった一つの命を作り出すことすら人間にはできません。

干上がった海底に林立していた「カキ」
〈撮影・富永 健司氏〉

諫早湾のみならず現在日本では数限りない命の抹殺が、公共事業と銘打って私たちの税金で行われています。多くの人が首をかしげ、不必要といわれる事業もおカネに目がくらんだ人には懐を潤すかけがえのない事業なのです。諫早湾からハイガイが絶滅したことは日本からハイガイが絶滅したということです。日本一の渡り鳥の餌場や、唯一ここを自生地としていた日本最大のシチメンソウの自然群生地も雑草の茂る荒地と化してしまいました。もう私たちは数万羽のシギ、チドリが乱舞する姿も、優美なシチメンソウの紅葉も楽しむことはできません。

自然との共生は、一昔前の開発か自然保護かの議論ではなく、人間を含むすべての生物の生存基盤を守る発想に立たなければなりません。ムツゴロウをタイやヒラメと比べてみたり、クマタカに平然と石を投げ、人間の存在を主張する政治家の発想とは遙かに次元の違うものです。物言わぬ多くの命を代弁する人の叡知や優しさがあって、はじめて共生の実現を可能にすることができるのです。

私は諫早湾との出会いによって自然の見事な仕組みを知る機会を得ました。地球上に存在するすべての生きものは、存在する意味をもっていて、それぞれの命の連鎖を繰り返していること。そのひとつひとつが支えあって、地球というひとつの生命体を作っていることなど、人間の想像力を超えたところで巧みに繋がりあう命のしくみに気がついた時、科学も人間も到底手の届かない大いなるものの存在に、思わず手を合わせることしかできませんでした。

最近の社会問題である少年たちによる犯罪は、人が経済（おカネ・効率）という尺度でしか物を考えなくなった、ここ二〇～三〇年の私たちの社会の歪を写しているように思えます。すべての価値をおカネや数価で判断するようになって社会が息苦しくなりました。ついて行けない人たちや、数値に表現できないものには負のレッテルが貼られ、右肩上がりになることを要求する社会ができあがりました。私たちの周りの心安らぐ自然すら、そのままでは価値のないものとしておカネ儲けの対象となりました。本物の自然をコンクリートで固め、公共工事によって落とされる経済効果に人が群がりました。切り倒される木の痛みや悲しみも、住み処を追われる動物たちの気持ちも、振り返る人はいなくなりました。おカネに追われて働く親の下で、生まれた時から大人の価値観を背負わされ、子どもたちは細切れの時間の中で人と人との心のつながりを無くしてゆきました。モラルをなくした社会で自然と切り離された子供たちは過激な映像の世界で遊び、目の前を交錯するコマーシャルの中で育ちました。木、草、水、魚、虫、鳥、動物や、ペット……カブトムシまでが自動販売機の中で売られる時代に、命に対する感性は失われてしまいました。低年齢化する一方の少年犯罪は、過酷な現代社会の中で、拠り所をなくした子どもたちの、心の不安をはるかに越えた魂の怯えの現れのように思います。

ある生物学者の報告によれば、人間だけではなく六年ほど前から光の害による植物のストレスが指摘されているそうです。光りのページェントと多くの人が喜ぶ夜間のライトアップや、夜も消えない街の明かりにバクテリアから昆虫、鳥や植物までも体内時計が狂ってきているそうです。そのストレスに耐えられる期間が樹木であと十四年くらいで、その限界を越すと木が枯れ始めるそうです。低地の都市部では酸欠状態で多くの人が命の危険にさらされるという怖い話です。長野県の小諸の山中に天文台を持つ彗星探索家の弁によれば長野県からも、赤々とした東京の明かりが山の稜線を照らすのが見えるそうです。「昔は夜になれば目の前の人の顔も判らないくらい暗かったのに」と、彼は嘆いています。

そのような話を聞きながら私は宮崎駿の「風の谷のナウシカ」を思い出しました。多くの大都市が崩壊し腐海に呑まれ、地上に人が住めない時代がくるのかもしれません。光害だけでなく、ダイオキシン、核物質、温暖化、寒冷化、オゾン層破壊、環境ホルモン、感染症、異常気象、食糧危機、など五十年前には思いもつかなかった重要課題を、人類は抱え込んでしまいました。考えただけでも背筋が凍る思いです。現在の爆発的な人口増加も地球という生命体が生存のバランスを保つため、何らかの作用を働かせ遠からず激減することになるだろうとの予測もあります。このような考えは楽天的に生きている人たちにはかなり過激に思えるかもしれません。しかし現在の地球環境を深刻に捉え、各地で精一杯の活動をしている人たちの中ではほぼ常識なのです。歴史を遡って見ると、いき過ぎた開発が巨大文明の崩壊を招いているのです。

環境の変化は緩慢です。人は自身の身に何か大変なことが起こらないと気がつかないのですが、早くから「ゆでガエル」説を唱えている人たちにしてみれば、現状でのソフトランディングは有り得ないらしいのです。

また私たちの国の経済的豊かさの裏側に目をやれば、そのほとんどの資源を発展途上国に頼っています。それでは輸出国である途上国の人たちが、日本並みに豊かかと言われれば完全に「NO」なのです。資源を売れば売るほど貧しくなり最後は自分たちの生活基盤さえ残りません。現代の社会は経済という魔物の陰で、小さな人と人との関係から国と国との関係に至るまで、すべて損か得かで判断が下され、そこには強者と弱者の関係しかありません。戦争という直接的な行為に頼らなくても、途上国に先進国の価値観を押し付け、選択の余地のない状態で便利快適の味をちらつかせ、すべてを奪ってしまう行為は、戦争と何ら変わらない人間の破壊行為でしかないのです。その結果、貧困に喘ぐ途上国の人たちは生活基盤を壊され、独自の文化を失い、経済という大きな波に飲まれてしまいました。国内でも顕著に同じようなことが起こっています。大型店に押されて個人商店が立ちゆきません。商店街が過疎化して大型店一人勝ちの現状の中で個人商店だけでなく、遠方に行くことができない弱者が取り残され、地域の文化も壊されています。

このように、現代の社会では地球を構成する全てのものが、不必要な弱肉強食にさらされています。自然の中の生態系の繋がりや食物連鎖などによる循環は地球が永続するシステムとして必要なことですが、現代のようにすべて人間中心の損得勘定の上に成り立った経済行為は、地球の存続を根本的に不可能にしてしまうでしょう。人体の中でガン細胞の増殖が人の死に繋がるように、地球という生命体の中でも人間という一種の暴走は許されません。なぜなら、すべての命は繋がっていて、人間もその一部でしかないのですから。

一昔前までは人間の倫理の中に、度々神の存在が語られていました。すべての人が自然の脅威を人の手の届かないものとして恐れ、小さな子どもたちへのしつけの中で、そんなことしたら「天の神様に言うよ！」とか「ばちがあたるよ！」という大人の言葉が、三つ子の魂百までという意識の中に刷り込まれ、社会のモラルを作っていたように思います。

現在ではほとんどこのようなことはありません。神話を語り継ぐ大人がおカネに目がくらんで「迷信、迷信」と笑い飛ばし、犯してはならない領域への作法が失われてしまいました。神の存在を否定し、作法を失った社会に、いま自然の多くの生きものたちが巻き込まれつつあります。

私たちはこの五十年余りの中で、無くしてしまったたくさんの神話を蘇らせる時にきています。

東洋には「山河草木悉有仏性」という哲学があり、現代のような自然対決型の考えに対する歯止めを成していました。

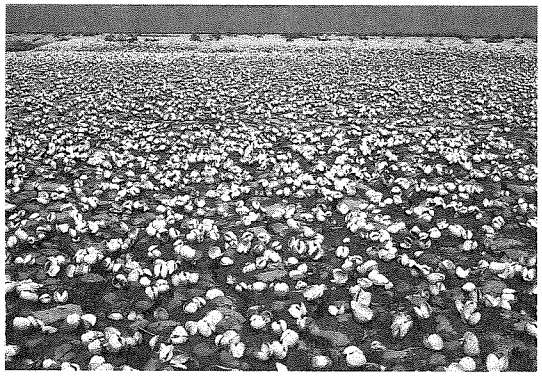
先住民とよばれ、今地球上で細々とその文化を守り生きている人たちは、この言葉のように自然のみならず、万物への畏敬の念が生活の中心にありました。その中にこそ命の価値が存在し、神の存在も永続可能な世界もあったように思います。私たちは神の存在を見失い、慈悲の心や感謝の心を忘れかけた社会で生きています。そのことを意識すると、それぞれの立場で果たさなければいけない責任は大きいと思います。

諫早湾閉め切り以来、まるで何かに追い立てられるように過した三年間の日々は、いま『生きろ　諫早湾』という人の魂を凝縮した一言付き写真集となって、全国の人たちの心を揺さぶり、一人歩きをはじめました。日本では草の根の環境NGOにはほとんど財政的な援助もなく、人の思いの力がすべてです。そんな中で『生きろ　諫早湾』は一人一人が出せる範囲のお金や知恵や力を出し合い、また一一三三人の参加者のすべてが、名前の公表とともに参加費以上のお金を負担して作られました。不必要と言われながら、何十年も前に計画された事業を国の絶対的権力の下に行う公共事業に対し、一市民はどんなにあがいても象の足に噛みついたアリの存在でしかありません。けれども人の思いの広がりは、「新しい未来の芽」を確実に社会に根付かせていく力になると信じています。『生きろ　諫早湾』、私たちはこの本の力を借りて、人間の魂の声を発信したいと思います。

一方、これから新しい千年紀を迎えるにあたって、宗教に対しても熱い期待を押さえることができません。言いかえれば、いまこそ宗教の価値が問われている時代でもあります。祈りの世界にとどまらず、行動を起こすことです。宗教者は神が創造したとされる自然の破壊に対し、怒りや悲しみをそれぞれのメッセージとして発信して欲しいのです。完璧な命の仕組みや繋がりの中で、国境など存在しない、地球というたったひとつのかけがえのない生命体があることを、多くの人が早急に認識する必要があります。世紀の狭間に、本気で多くの人が動き、自然が蘇り再生される時、人が癒され命が輝きを取り戻していくでしょう。人が人として蘇るために、その役割を期待されているのが宗教だと私は信じています。

まさに「神の場における地球環境の存続」に対し、崖っ淵に立たされた人間が、神に試されている時代ではないでしょうか。

〔連絡先〕
☎&F 095・883・1833



諫早湾で絶滅したと言われる「ハイガイ」
〈撮影・富永 健司氏〉